

月の花挽歌 ～13. リスク・マネージメント～

13. リスク・マネージメント

13- 1

麻里子の運転するシビックハイブリッドは上田盆地の千曲川左岸にある河岸段丘の塩田平の田園風景の中を走行していた。

信州の鎌倉の通り名を持つ塩田平は、鎌倉時代に北条氏に統治され、東信濃の政治文化の中心だった。今でも国宝や重要文化財などの歴史的建造物が多数残されている。

初秋の薄曇りの昼時であったが、昨夜の踊りの高揚感の名残りが真紀の心身に留まっていた。

長野新幹線の上田駅まで送ってくれると麻里子が言ってくれたので、真紀は甘えることにした。

「忙しいところを悪いですね」

「月曜日は団体客の予約もないので、気になさらないでください。失礼ですが、着てらっしゃるのは上田紬でしょ。よろしかったら、紬工房もご案内いたします」

助手席にいる真紀は何かを見透かされているようで、ハンドルを握っている女杜氏の横顔を盗み見した。

「フランス帰りのオーナーシェフがやっているレストランでランチもご一緒させてください」と麻里子は言って微笑み返してきた。

麻里子の屈託のない笑顔を見ていると、一寸先は闇と言うたとえがあるが、藪から棒に酒造会社の深刻な経営状態の話など切り出される展開になろうとは思ってもよらなかった。

真紀との邂逅は、目に見えない兄の力が働いたからだと独り決めした麻里子は、馬が合ったことも手伝って、このままやり過ごしては、後になってきっと後悔すると思い、しばらく続いた当たり障りのない会話が途切れて塩田平に入ったところで、「真紀さん、いきなり内輪のことを打ち明けて気を悪くしないでくださいね」と前置きをしてから、「昨日お会いしたばかりなのに……。でも、不躰であることは承知で言っちゃいます。うちの会社は、ああ見えても実は、火の車なんです」

「———」

「そうですよね！赤の他人にお話しする事ではありませんよね。私、どうかしているは」

「赤の他人なんかじゃありませんよ！お話し続けてください」

数分の沈黙があってから、麻里子は白くて可憐な秋ソバの花が咲き広がる畑の傍らに、プレミアムホワイトの車体を停車させた。

月の花挽歌 ～13. リスク・マネージメント～

13- 2

「私は科野青年会議所のメンバーでもあるので、それなりの情報は自然と耳に入ってきてしまいます……。その噂話を聞いたのは、兄の49日法要が終わって間もなくでした」と途切れ途切れに話す麻里子の頬を、いつの間にか涙が濡らしていた。

「でも、深く知る事が怖くて怖くて、噂は噂として放っておいたのですが、我慢しきれなくなって、義姉にそれとなく打診してみたのですが、埒が明かないのでジリジリしていると間もなく顧問税理士に兄の遺言書を見せられたのです。兄は数社に多額の生命保険を掛けていて、下りた保険金は全て負債の補填に充てられていたのです。それでもなお傘下の味噌会社の負債は賄いきれなくて、そのしわ寄せが屋台骨を脅かしているのです」と麻里子は泣き笑い顔で堰を切ったように話した。

ハンドルを握ったままの女杜氏の左手に、真紀は右手をそっと置いた。

「話してくれて、良かったわ。よく分かりました。何とかかなりそうな案が思い浮かんだので、少し時間をもらえませんか？」と真紀は閃いたアイデアを頭で具体化しながら、女杜氏の手を握り締めて言った。

「真紀さんは兄が本気で好きになった人ですから、お手数をおかけしますが、お任せいたします。ただ、義姉はプライドの塊のような人ですから心配です」と女杜氏は安堵感の中に一抹の不安を漂わせて言った。

「大丈夫よ。どのような人であっても、背に腹は代えられない時があります」と真紀は毅然とした態度を見せて言った。

上田駅から13時台の上り（あさま）に乗り大宮駅を過ぎたあたりで、どこからともなく乗客のざわつき声が車内のあちこちで発せられ、閉じたままの目の奥で、経営危機をおくびにも出さなかったし気配も見せなかった昌幸の胸中を推し量ったり、麻里子との会話の内容を転がしていた真紀は、否応なしにニューステロップのリーマン破綻の記事を見ることになった。

緊急時の連絡網のいの一番にあたるスタッフに真紀は携帯電話で『こはる』への集合を伝え、15時過ぎに東京駅八重洲北口からタクシーに乗った。

10分程で『こはる』に着いた真紀は、一息入れてから、事態の分析に肝要な適任者を顧客の人脈の中から数名ピックアップして、迅速に情報収集を行った。

17時には1名を除き主要スタッフ全員が揃ったので、真紀の対処方針を開陳すると、皆の考えと突き合わせて意見交換をして、急場をしのぐことに役立てた。

年越しをできないで閉店する老舗のクラブも多少あったが、サブプライムローンファンドを保有していなかった日本やアジア地域の金融機関では、あまり影響を受けなかった。